発達理論の学び舎

Back Number: Vol 281

Website:「発達理論の学び舎」

目次

5601. 今朝方の夢

5602. 微笑む仏陀の人形を購入して

5603. クリプトクロムと群衆心理学

5604. マルコフ過程・詰将棋と作曲

5605. 数秘術・占星術と作曲：今朝方の夢

5606. 確定申告の終了：リズムに関するピエト・モンドリアンの思想

5607. 脱力・集中・チェンバロ ：今朝方の夢

5608. 新型コロナウイルスの欧州における状況：視覚・聴覚と意識変容

5609. 学ぶことを愛する姿勢を育む教育：今朝方の夢

5610. 意識の純粋な基底：マスメディアと集団催眠

5611. 今朝方の夢：模倣に次ぐ模倣

5612. 輝く今日という日の中で

5613. 動植物を愛でる気持ちと本の香り

5614. 「コロナ鬱」に見る報道の歪み：全ては色と音

5615. 早朝に思うこと：今後の生活拠点

5616. 今朝方の夢

5617. バッハとテレマンに関する思い出と彼らが作曲に活用した数秘術

5618. バッハの音楽とダ・ヴィンチコード：数秘術を活用した作曲実践のアイデア

5619. クレーの日記を読んで：香りを引き出す音の探究

5620. 寒さの残るフローニンゲンと暖かくなるアテネ：今朝方の夢

© YOHEI KATO 2020

5601. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。週末を迎えた今日の起床は午前5時だった。朝起きてみると、もうすでに小鳥たちが鳴き声を上げ始めていた。以前の日記で言及したように、鳥や虫たちの鳴き声には、私たちの脳を癒す力がある。それを今朝も実感した。夜が完全に明けていない今もまだ小鳥たちが鳴いており、それはそっと自分の心を癒してくれる。

今朝方はいくつか夢を見ていた。夢の振り返りをしながら、自分の無意識の世界をより拡張させていこう。そして、拡張過程の中から得られた感覚やアイデアを創造活動に活かしていこう。無意識の世界にはただならぬものとただならぬ力が存在している。

夢の中で私は、海岸沿いの旅館に宿泊していた。そこは雰囲気からして日本である。より正確には、おそらく中国地方のどこかの県であるような雰囲気を発していた。その旅館には、小中高時代の友人たちが数多く宿泊していて、さながら学校の修学旅行のような感じだった。私は、高校時代に知り合った友人（HH）と一緒に旅館の外に出て、少しばかり散歩をしながら話をしていた。

すると突然雨が降ってきて、私たちは近くに駐車してあった車の中に避難した。その車には運転手が乗っており、その人は私たちに行き先を尋ねた。私たちは雨宿りのために車に駆け込んだだけなので、どこにも行く予定はなかった。そのことを伝えると、友人の彼は雨に打たれて少し風邪のような症状を見せ始めた。私はそれを心配し、彼の症状を軽くするような方法が何かないかを考え、一旦車の外に出た。

すると、その場が突然天然芝のサッカーグランドに変わった。横を見ると、先ほどまで風邪のような症状を見せていた彼が元気な姿で立っていた。どうやら私は、サッカー日本代表としてこれからW杯に出場するようだった。ふと私は、そう言えばこれでW杯に3大会連続出場することに気づいた。

隣にいた友人と、初回、第2回、そして今回の自分のポジションがどこかを振り返った。自分でも忘れていたのだが、どうやら私は全大会において全て右ミッドフィルダーとして出場していることがわかった。三大会連続で出場し、しかも同じポジションをずっと担当している選手というのは世界的に見てもそれほど多くないのではないかとふと思った。そう思ったところで、今大会は右のサイドバックとして出場する可能性が高いことがわかってきた。

大会直前の合宿中に監督からそのポジションを試してみることを提案され、その提案を快諾していたのである。なぜか私の頭の中では、右サイドバックを務めたら、今度は左サイドバックだなと思った。そして実際に他のメンバーたちとトレーニングを始めてみると、自分だけがプロではないことに気づいたのである。私は単なる一般人であり、普段サッカーをしているわけでもない。そんな人間が今度W杯に出場するというのは大変なことであり、それに向けた準備は生半可なものではないことに気づいた。

明らかに自分の身体はサッカー向けのそれではなく、本大会においては、まともに身体のぶつかり合いをしていてはならないと思い、古武術的な身体を作って大会に臨み、古武術の動きで相手を翻弄しようと思った。今朝方はそのような夢を見ていた。実際には、海岸沿いの旅館の場面では、小中学校時代の別の友人（YK）と話をしながら館内を歩き回っていたことを覚えている。館内は、近現代的（未来的？）な立体迷路のような作りになっていて、迷路を歩きながら会話を楽しんでいたのを覚えている。フローニンゲン：2020/3/7（土）06:59

5602. 微笑む仏陀の人形を購入して

つい今し方夕食を摂り終え、時刻は午後7半を迎えようとしている。今日は一日中晴天であり、昼過ぎに書斎で日光浴をし、仮眠後には街の中心部に出かけた。まず最初にオーガニックスーパーに立ち寄り、そこで大麦若葉のパウダーと椎茸を購入した。自分自身は午後に日光浴をしたのだが、午後に購入した椎茸を天日干しする時間はほとんどなく、明日以降の晴れた日にそれを行いたい。

仮眠後から3時間ほど息抜きがてら街の中心部で時間を過ごしていた。オーガニックスーパーに立ち寄った後は、ドイツから届けられた書籍を受け取りに、フローニンゲン大学の哲学科の講義棟がある付近に向かった。途中で、街の中心部の大型書店を前を通り過ぎようとした時に、ふと足が止まった。そして私は何かに引き寄せられるようにして、店の中に入った。当たり前であるが、基本的にオランダの大型書店に置かれている大半の書籍はオランダ語で書かれており、英語の書籍の数はたかが知れている。それでも私は、何かに導かれるようにして店内に入った。

その書店の中に入るのは初めてであったから、どこにどのようなコーナーがあるのかを最初に確認し、気になる書籍を手にとって中身をパラパラと眺めていった。経済学の新書、脳科学の新書、音楽の新書などを見た後に、哲学書のコーナーに行きつき、そこで大変興味深い書籍があったので、それを迷わず購入することにした。その書籍を購入することは当初全く計画していなかったので、それはきっと何かの縁だろう。ドイツから届けられた書籍は複数あり、それらは重たいことがわかっていたので、音楽関係の書籍で購入しようか迷ったものについては今日は購入しなかった。また機会を見て、その書籍が本当に必要であると判断したらそれを購入しにまた書店に足を運びたいと思う。

その後私は、書籍の受け取り場所の真ん前にあるYantraという店に入った。店内は客で賑わっており、香りの良いお香が炊いてあった。お目当ての仏陀の小さな人形があり、それを購入することにした。"Happy Buddha"シリーズの人形が数多く置かれていて、1つを選ぶのに随分と時間がかかった。最初私は2つぐらいを購入しようかと思ったが、まずは1つ購入して、様子を見ることにした。興味深いことに、ミラーニューロンのなす技なのか、微笑む仏陀の人形を見ていると、こちらも思わず微笑んでしまう。

何体もある中で、一番笑顔が素敵な仏陀を選ぶことにし、とてもいい買い物ができたと満足な気分になった。さすがHappy Buddhaである。今、それを書斎の机の上に置いて眺めている。ヴェネチアのIL Papiroで購入したペン立ての横に微笑む仏陀を置くことにした。ちょうどペン立ての前に飲み物を置くコースターがあるので、これからは毎日、飲み物を飲むたびに微笑む仏陀を見ることになり、そこで思わず私も微笑むだろう。

Happy Buddhaは、それが幸福をもたらすというのは別に迷信的なものでもなんでもなく、それを見てこちらが微笑むことによって、脳内から幸福物質が分泌され、それが本当に幸福感を感じさせるのだろう。そして、そうした幸福感の中で日常生活を営んでいれば、それは幸福なことが起こるのも当たり前かと思う。いずれにせよ、今夜から微笑む仏陀がそばにいることは、とても穏やかかつ和やかな気持ちにしてくれる。フローニンゲン：2020/3/7（土）19:44

5603. クリプトクロムと群衆心理学

今日は超心理学の分野で有名なディーン·ラディンの書籍を読んだ。その中で、磁力を敏感に感じ取るタンパク質「クリプトクロム」という物質が、動植物だけではなく人間にもあることに関心を持った。それは磁力を敏感に感じ取ることを司る物質であるだけではなく、概日リズムの調節を担うとのことであり、そう考えてみると、人間にも意外と馴染み深いものであることがわかる。

実は数日前の就寝時に、シャチやイルカが超音波を発し、物質に跳ね返ってきたそれを敏感に察知する能力についてなぜだか考えていた。そして、それと貨幣の虚構性というテーマを組み合わせて考えており、結局その組み合わせが自分でも面白く、1時間ぐらい寝る前に考え事をする形になった。そんな出来事があったことを思い出しながら、磁力を敏感に感じる取るクリプトクロムの生成を、変性意識を用いて促すことができれば、磁力を通常以上に感じ取ることも可能なのではないかと思われた。そのような仮説的なことを考え、ちょっと実験でもしてみようかと思う。

4月の書籍の一括注文に向けて、今日もまた購入予定の文献リストに10冊ほど書籍が追加された。とりわけ、群衆心理学(crowd psychology)への関心が高まり、何冊かこの領域の書籍を購入しようと思う。

現代人の心身を蝕み、腐敗を引き起こしているのは、特定の個人や組織というよりもむしろ、それらが共謀して作り出している時代精神とそこから派生した種々の仕組みなのではないかという考えが浮かぶ。群衆心理は、そうした時代精神と複雑に張り巡らされた種々の仕組みによって操作されている。群衆心理学を学ぶことによって、今この現代社会に蔓延している奇妙な群衆心理と群衆行動をより深く理解したい。そうした理解がなければ、この問題に介入していくことなどできないだろう。また、この現代社会で生きる自分自身も群衆の1人であり、自分の思考や行動は、少なからず時代精神と巨大な社会システムに影響を受けている。私たちは、自分の思考や行動を自分のものだと思いがちだが、実は大抵の場合そうではない。

それらは自分以外の何ものかによって構築されているのがほとんどである。その何ものかというのが時代精神であり、巨大な社会システムである。それらが生み出す思考や行動は、往々にして私たちを制限し、抑圧する。それらからの解放、及び自分の身と精神は自分で守るために、群衆心理学を

含め、広く様々な領域について学習を続けていく。4月に購入予定の書籍の分野に関して言えば、群衆心理学、現代精神分析学と組織·社会の精神病理、経済思想史などがさらに理解を深めたいものになるだろうか。フローニンゲン:2020/3/7(土)20:52

5604. マルコフ過程・詰将棋と作曲

今、小鳥たちが清澄な鳴き声を上げており、1日の始まりを祝福している。日曜日を迎えた今の時刻は午前6時に近づこうとしている。

昨日街の中心部のYantraという店で購入した、微笑む仏陀の人形を眺めている。笑顔というのは不思議な力を持っており、それは伝染するようだ。その人形を見ると、思わず私も微笑んでしまう。それによって、本当に幸福感が滲み出てくるから興味深い。人間の心身はうまくできたものである。

昨日も改めて、意識·無意識·身体感覚の探究と開発及びその活用に従事していこうと思った。現在の広範な領域における読書はそれとの関係においてなされる。また、意識·無意識·身体感覚の解放と開発とは逆向きの力が現代社会に働いていることは否定できず、その力の特性と生成メカニズムについての探究も様々な学術領域の観点から行おうとしている。昨日書き留めた群衆心理学というのはその一つであり、現代精神分析学もまたその一つだ。

昨日はマルコフ過程と作曲との関係について考えていた。通常、文章の生成においてはマルコフ過程に従う。すなわち、ある文字の出現確率は、それ以前の文字がいかなるものかによって影響を受けるということだ。その特性を考えてみると、一見確率的に無秩序に見えるような形で音を生み出そうとしても、音と音の間を繋ぐ関係性の力が内在的にあることを考えると、音の生成もマルコフ過程に従っていそうだということが見えてくる。

音と音の間を繋ぐ関係性の力というのは、まさに美しい音楽を生み出すための理論として随分と体系化が進んでいる。そうした理論を学びながら、同時に既存のマルコフ過程に従わないような形で音を生み出していきたいとも思う。そのようなことを考えながら、昨日もまた将棋と作曲との関係について考えていた。特に、今の自分の作曲の仕方というのは、詰将棋を作るのに近いと思った。

調べてみると、詰将棋作家という人たちがいるようであり、彼らの詰将棋制作方法とそのアイデアが自分の作曲に随分と参考になった。今後は短い俳句を作っていくという意識に合わせて、詰将棋を作るという感覚を持ち合わせていこう。手数の少ない詰将棋の問題でありながらも、そこには絶えず音楽理論上の観点やある特定の意図を盛り込んでいく。今日の作曲実践も非常に楽しみだ。

数日前にふと、今のところないとは思うが、仮に日本に居住地を移し、北海道などの自然が豊かな県の大学か母校で教鞭をとるとしたら、身体心理学、作曲理論·音楽理論、群衆心理学と現代精神分析学（とりわけ組織や社会の精神病理をテーマとして）、経済思想、意識状態に関する授業を担当したいとふと思った。

領域は多岐に渡り、関連性はあまりないように思えるかもしれないが、自分の中ではそれらは全て一なるものである。これまで専門にしていた発達心理学や発達科学については教える気はほとんどないということも見えてきた。上述の領域に関して知見を共有するのにはまだ時間がかかるだろう。その実現に向けて今日も旺盛な読書をし、自分自身と現代社会の現象に絶えず引き付けながら探究を行っていく。フローニンゲン：2020/3/8（日）06:12

5605. 数秘術・占星術と作曲：今朝方の夢

昨日街の中心部にあるYantraという店を訪れたとき、小さなゴングを購入するかを悩んだ。それは空間を浄化するような音を奏でることができ、店に置かれているいくつかのものを試しに鳴らしてみた。すると、空間に清らかな音が響き渡っていく感覚を実感し、改めてその道具に関心を持った。音を鳴らし、耳を近づけてみると、それは間違いなく脳と意識の状態に何らかの作用をもたらすことがわかった。

昨日は購入をしなかったが、また次回店を訪れたときに購入を検討したい。それともう一つ、ショーンバーグよりも早く12音技法を発明したとされるヨーゼフ·マティアス·ハウアーが、易経をもとに作曲をしていたことに触発され、店に置かれていた易経関連の書籍を手に取って眺めていた。それらはオランダ語であったからあまり理解が進まなかったが、確かに易経の観点を作曲に取り入れるというのは面白く思った。すると、易経のコーナーの右横にタロット占いのコーナーがあり、実際にタロットカードも販売されていた。

これまでタロット占いを含む占星術にはあまり関心を示してこなかったが、そこに含まれる数字を数秘術として眺めてみれば、作曲に活用できるかもしれないと思った。ただし、易経にせよタロット占いにせよ、そこで用いられている数字が正確に12個ではないようなので、12音に対応させるには工夫がいる。今すぐにそれらを作曲に活用する気はないが、数秘術と占星術を作曲に応用するという観点は保持しておきたい。近々イギリスから届く、バッハと数秘術に関する書籍は有益な観点をもたらしてくれるだろう。

それでは今朝方の夢について振り返りをし、その後、早朝の作曲実践に取り掛かりたい。ここ最近は、理論書の譜例を再現し、そこに自分なりの工夫を加える形で作曲をしており、そのプロセスが実に楽しい。今日も音を生み出す遊の世界に浸り切る。ただし、夕方には確定申告を済ませることは忘れないようにしたい。

夢の中で私は、小中学校時代のある女性友達(AS)と一緒に、夢の中のその先にある夢の中の世界で冒険をしていた。夢の階層性をもう一段降りたところにあるその夢の世界は、現代の人間界とほとんど変わらないように思えたが、少しばかりメルヘンチックな感じがあった。そうした神秘さが漂っていたのである。

私たちはその世界を散策しており、途中で木々の前で少し休むことにした。休んでいる最中に、彼女の腹筋が何層にも割れていることが話題となり、彼女の肌の調子の良さについても話題となった。そのような話をしていると、私の体は突然別の場所に移動していた。どうやらそこは実家のようだった。しかもそこは、現在の実家ではなく、私が小中学校時代を過ごした社宅のようだった。

ちょうど私は自室で資産管理をしていて、パソコンを用いて投資対象のポートフォリオの見直しと組み替えを行なっていた。あと少しでその作業が完了するところまで来たときに、父が私の名前を呼んだ。どうやら父は卵焼きを朝食に作ってくれたようだった。

時刻を確認すると、学校に行く時間が迫ってきていることに気づき、投資ポートフォリオに関する作業の残りを一気に片付けることにした。無事に作業が終わり、パソコンをシャットダウンさせようと思ったところでまたしても私は別の場所に瞬間移動していた。私は大学院の教室の中にいたのである。

そこはどうやら日本の大学院のようだ。教室には日本人の学生しかおらず、授業が行われていたが、大して活発な議論がなされていなかった。

そこで私は挙手をし、ある論文の実験結果について意見を述べた。著者は、自らの仮説を立証するのとは逆の結果が出たことを誠実に論文にまとめたことは関心するが、実験デザインに少々不備があると指摘した。とりわけ、妥当性を脅かす種々のリスクを軽減するための実験グループの設定がなされておらず、アセスメントの導入タイミングについても少し問題があることを指摘した。その意見に対して、周りにいた大学院生たちのみならず、教授もいまいち自分の主張を理解していないようだった。その大学院の社会科学研究では、そうした作法について教えることがないのだなとわかったところで夢から覚めた。フローニンゲン：2020/3/8（日）06:41

5606. 確定申告の終了：リズムに関するピエト·モンドリアンの思想

時刻は午後7時半を迎えた。今日は夕方に確定申告を無事に済ませることができた。オランダでは税務当局のウェブサイトから申告を行う必要があるのだが、全てオランダ語表記であったため、一つ一つ文言を英語に翻訳していきながら申告手続きを進めていると、意外と時間がかかった。想定では30分から1時間ほどで終わると思っていたのだが、色々と申告項目について調べていると時間がかった。

今年からは個人事業主として活動を始めていたこともあり、それが昨年の申告と変化した点だった。予想以上に時間がかかったが、無事に申告を済ませることができてホッとしている。今月末のアテネ旅行の前までに申告を済ませておきたかったので、それが完了した今となっては、旅行まで自分の取り組みに従事することができる。

今日はオランダの画家ピエト·モンドリアンの生涯について調べていた。音楽上におけるリズムについて調査をしていたところ、モンドリアンのリズムに関する思想に行き着いた。彼は絵画の世界でリズムを表現した人間だった。書籍として、“Mondrian’s Philosophy of Visual Rhythm: Phenomenology, Wittgenstein, and Eastern thought”というものが出版されており、この書籍を通じてモンドリアンのリズムに関する思想について理解を深めていこうと思う。また、モンドリアンが生まれたオランダのアメルスフォールトにあるモンドリアン美術館に今年中にぜひ足を運ぼうと思う。オラ

ンダにはその他にも、ドイツとの国境沿いのWinterswijkという街にもモンドリアンの美術館“Villa Mondriaan”がある。ここにもぜひ足を運んでみたい。モンドリアンの抽象画には何か惹きつけられるものがある。

絵画におけるヴィジュアルのリズムは、作曲においては楽譜上の音符のヴィジュアルリズムと関係付けることができるかもしれない。そうしたことからもモンドリアンの思想は、作曲上における洞察を与えてくれるだろう。

リズムの科学的な側面について探究している書籍もいくつかあったが、それらは今の私にはあまり必要だとは思えず、書籍の購入リストに加えることはなかった。一方で、オックスフォード大学出版から出版されているリズムの哲学に関する興味深い書籍“The Philosophy of Rhythm: Aesthetics, Music, Poetics”を発見し、こちらは購入リストに加えた。アテネ旅行に行くまでの時間、及び旅行から帰ってきてからの読書は実り多いものになるだろう。

午後にふと、各種のヒーリング（治癒）というのは対処療法的な処置であり、本来はヒーリングなど必要のない状態や社会が理想なのだと思った。そうした状態や社会の実現に向けた探究と取り組みも、上記の探究テーマと並行して行う。経済金融思想のみならず、それらのシステムにまで探究を広げていくことになるだろうが、それらについてはどこまでの深度で探究をするかは未知である。とりあえずは思想的な側面から入り、そこから制度·システム的な側面に探究の幅を広げていこう。4月に購入する予定の書籍を通して、少しばかり制度·システム的な側面に踏み込んでいくことになるだろう。フローニンゲン：2020/3/8（日）19:40

5607. 脱力・集中・チェンバロ ：今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今朝も小鳥たちが澄み渡る鳴き声を上げていて、それが外の世界に響き渡っている。世界に反響する彼らの鳴き声を聞いていると、自ずから瞑想的な意識になる。

現在読み進めている、音とトランスに関する書籍に記述がある通り、音には意識状態を変容させる力が強くある。今日もまた、脱力と集中を意識して自分の取り組みに取り組んでいこうと思う。その際には特に呼吸を意識していく。呼吸は意識状態の調整と変容のドアである。呼吸については、先ほどの踊りの際にも意識をしていた。

起床直後のヨガの後に音楽をかけながら踊りを踊ることが習慣になった。時間としては短いが、身体の内側に入っていくような形で意識を内面に向け、音楽に合わせて踊っている。その際にはレオンハルトが演奏するチェンバロ（ハープシコード）の曲を聴いている。

初めて意識的にチェンバロの音を聴いてみた時、それまではピアノ曲ばかり聴いていたので、チェンバロの音に慣れないものを感じていた。だが今となっては、チェンバロが生み出す倍音豊かな音をとても気に入っている。現在聴いているレオンハルトのアルバムは、5時間ほどの長さなので、当分はレオンハルトのチェンバロ演奏に合わせて踊りを踊ることにしたい。

それでは今日も今朝方の夢について振り返り、早朝の作曲実践を楽しみながら行いたい。現在用いている2冊の理論書を一通り参考にしてコラージュ的な曲を作ったら、再度その書籍を最初から読み返し、その際には解説を理解しながら解説項目を曲に応用していこう。今は解説をさっと読み、それほど深く理解することなく曲を作っている。頭で解説項目を理解するのではなく、とにかくまずは音を実際に鳴らしてみて、身体感覚を通じて解説項目を捉えるようにしている。実際のところは、概念を捉えるというよりも、まずは内的感覚を通じて概念に触れるということを意識している。目には見えない概念に触れてみて、そこから徐々に頭での理解につなげていくという流れが理想的である。

夢の中で私は、日本のどこかの県にいた。より具体的には、警察署の駐輪場にいた。自転車を漕いで駐輪場に向かい、駐輪場に到着すると、そこで小中高時代の友人（SS）と出会った。彼は何やら警察署で働いているようであり、ちょうど勤務日のようだった。

私はこれから1週間ほどの旅行に出かける予定であり、駐輪場のどこに止めれば安全かを彼に尋ねた。そこは警察署の駐輪場であったから、誰もそこで盗難を働くことはないだろうと考えがちだが、灯台下暗しを狙って盗難をする者がいるかもしれないと私は思った。すると友人は、彼が安全だと思われる場所を指差してその場所を教えてくれた。そこは日向になっており、周りから見えやすい場所であった。そこであれば大丈夫だろうと私も思ったが、アメリカのように自転車の盗難が日常茶飯事に行われるような場所で暮らしていた私にとっては、友人が教えてくれたその場所でさえも不安に思えた。

その場所に行き、実際に自転車を止めようとすると、やはり不安だったので、もっといい場所はないかを探してみたところ、なんと駐輪場一体に洗濯機が列を成していることに気づいた。大型の洗濯機の中に自転車を入れ、洗濯機をロックしておけば大丈夫かもしれないと思った私は、早速一台の洗濯機に自転車を入れてみた。

すると、すっぽりと自転車が入った。だが、果たして自転車を洗濯機に入れていいものかと思った私は、すぐに自転車を取り出そうとしたところ、洗濯機が自動でロックされ、そしてなんと洗濯機から水が出て回り始めた。私は慌てて洗濯機のストップボタンを押し、洗濯機の扉を開けた。すると、中から自分の洗濯物が大量に出てきた。私はそれらを入れた覚えがなく、なぜそこから出てきたのか不可解であった。しかし今日は良い天気だったので、そのままそこに干して旅行に出かけようかと思ったが、さすがに1週間も洗濯物を干しっぱなしにすることはできないと思った。

すると突然、洗濯物が全てどこかに消えた。洗濯機を離れ、再び駐輪場をぶらついていると、小中高時代の友人(RS)が自転車に乗ってやってくる姿が見えた。どうやら彼もこれから旅行に行くらしく、自転車を駐輪場に止めて行くとのことだった。話を聞いてみると、彼は数日間ほどの旅行をするとのことであり、数日間であればそこに駐輪しても全く問題ないかと思った。結局私はどこにも安心して駐輪できないと思い、何か打ち手はないかと考えていたところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は新幹線の中にいた。しかし、その新幹線は一般的なそれではなく、内装が随分と変わっていた。私は母と一緒にどこかに向かっているようであり、個室のような空間で話をしていた。しばらく話をしていると、自分の専門分野の1つに関する話となり、その話題について話をしていると、母は何か侮辱されているように思われたのか、少し機嫌が悪くなった。

すると、そこにいる人物が母ではなく、見知らぬ女性に変わった。そして私自身も消え、別の男性がそこにいた。どうやらその見知らぬ男女は姉と弟の関係のようだった。姿は消えたが、意識だけはそこにあった私は、彼らの話を聞いていた。すると、新幹線チケットの請求に関して2人は話し合っており、姉の方が代わりに払うということになった。

姉:「私が払うからいいわよ。心配しないで」

弟:「ありがとう。そういえば姉ちゃん、今どれくらい収入得てるの？」

姉：「う〜ん、89億円ぐらいかな」

弟：「えっ、そんなにもらってるの！すごい年収だな」

姉：「いや、それは年収じゃなく月収（笑）」

弟：「月収89億かぁ〜。俺なんか月収たったの400万円だよ…」

姉：「それでも十分立派よ。頑張っていると思うわ」

そのようなやりとりを聞いた時、私は姉の方がどのようなビジネスをしているのかに関心があり、おそらく何かしらの会社を経営しているのだろうと思った。一方で、弟の方はおそらく、それぐらいの月収であれば、単なる個人事業主なのだと思った。そのような推論が立ったところで夢から覚めた。目覚めると、時刻は午前4時だった。フローニンゲン：2020/3/9（月）06:46

5608. 新型コロナウイルスの欧州における状況：視覚・聴覚と意識変容

現在、新型コロナウイルスが世界的に蔓延しているようだ。かかりつけの美容師かつ親友でもあるメルヴィンから先日話を聞く限りだと、オランダ南部でも感染者が出ているようであり、調べてみると、欧州諸国の中で、オランダは感染者が多い方だということを知った。

一番被害が多いのはイタリアであり、それに続く形で近隣諸国のフランスやドイツ、スペインなどにおいて感染が広がっている。オランダはフランスやドイツと近いため、オランダでも感染者が出ていることはおかしなことではない。幸にもオランダ北部にはそれほど感染被害は出ていないが、このウィルスはもう場所を選ばず世界規模で拡大していることを見ると、十分な予防と対策が必要だ。人が多いところには行かず、とにかく免疫力を高めるように努めることが重要だろう。

3月の最終週にはアテネ旅行が控えており、ギリシャの様子を確認したところ、ギリシャでも感染者が出ているとのことである。オランダと比べれば、感染者の数は微々たるものだが、それでもアテネ市内の学校は休校になり、博物館や美術館も2週間ほど閉館となるようだ。幸いにも私がアテネを訪れる時には再び博物館や美術館が開館されるようだが、ウイルスの蔓延状況によっては事態が

変わる可能性がある。アテネに向かう際には、特にアムステルダム空港ではマスクを着けて予防をしようと思う。2年前の年末に日本に一時帰国した際に、その時は日本でインフルエンザが流行っていたので、父がいくつかマスクを渡してくれ、その残りが自宅にある。それを持ってアテネに向かうことにする。

日本への一時帰国と比べて、欧州内の移動ではそれほど疲弊することがないが、体調にはとにかく気をつけよう。アテネ滞在中は、毎回の旅と同様に、よく歩いて身体を動かし、栄養の高いものを少量摂取し、よく睡眠を取る。博物館や美術館においては、周りの人の様子を見て、マスクを着用しようと思う。

ホテルの受付では、現状どれだけウイルスが市内で蔓延しているのかを確認し、最新情報を得ておこうと思う。ヴェネチア旅行の際に、歴史的な洪水被害に見舞われ、自らの身は自分で守ることの大切さを実感した経験があり、今回も自分の身は自分で守ろうと思う。そのためには、情報得ることと、その情報をもとにした賢明な行動が不可欠だ。

今日は、シカゴ大学出版から出版された“Music and Trance”という書籍を読んでいる。そう言えば、シカゴ大学出版も優れた学術書を数多く出版しており、時折お世話になっていることを思い出した。本書もまさにそうした一冊であり、この書籍は出版年は古いが、音楽と変性意識について探究することに大いに役立つ。著者はフランス人の学者であり、緻密な調査と論考を重ねている。文章量が多いことを考えると、初読を終えるのは明日になるかもしれない。

音楽は文章のように、始まりから終わりに向けて線形的に流れていくため、そこで表現されている全体性を一挙に把握することはできない。一方で、絵画であればそれが可能である。そのような差異が音楽と絵画にありそうだということを昨日の散歩中に思った。端的には、音楽は聴く過程の中で徐々にゲシュタルトが生成されていくが、絵画においてはそれを見た瞬間にゲシュタルトが生成される。

意識変容作用に視点を変えてみると、音楽はトランス状態を引き起こす作用（ないしは意識変容作用）を強く持ち得るが、絵画はどうなのだろうかと考えてみた。今のところ、例えばバッハの音楽を聴いて昇天してしまった（逝ってしまった）話などを聞くが、絵画を見て同様の体験をしたという話をま

だ聞いたことがない。自分自身の体験を振り返ってみると、絵画を鑑賞して、存在が鷲掴みにされるような体験はあるが、昇天や失禁を引き起こすような作用が果たしてどれだけ絵画にあるのかは気になるところだ。人間は視覚が高度に発達し、視覚からの情報を多く得ているが、むしろそうした発達が、視覚を入り口とした形で意識状態の変容が起こらないような抑制作用を引き起こしているのかもしれない。

仮に視覚を通じて意識変容作用が起こってしまうようだと、視覚情報に溢れた現代社会では困ったことになりかねない。だが、仏教における密教においては曼荼羅を用いたり、他の宗教における密教では視覚的なシンボルを用いて意識変容を起こすような技法があることも確かである。また、現代社会においては、溢れた情報を視覚的に取り入れることによって、催眠状態·洗脳状態のような形で日々を過ごしている人が数多くいることを考えると、視覚を入り口として意識の変容を引き起こすことも不可能ではないことが見えてくる。一方、人間は音に抗うことができないと言われているように、聴覚には意識状態と密接に関わった何かがありそうだ。この点については、聴覚そのものの探究と、聴覚と結びついた脳の部位及び機能を調査する必要があるだろう。フローニンゲン：2020/3/9（月）09:57

5609. 学ぶことを愛する姿勢を育む教育：今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今朝の起床は午前4:45ぐらいであり、その時にはもうすでに小鳥たちが鳴き声を上げていた。

今日は1日を通して雨のようであり、目覚めた時から雨が降っていたのだが、小鳥たちはいつもと変わらない美しい鳴き声を上げていた。

昨日ふと、学ぶことを愛する姿勢を育むことを第一にする教育の大切さについて改めて考えていた。どのような知識が必要かわからない現代において、そして複雑化する課題に対して絶えず知識を刷新することが求められる現代においては、何か特定の知識項目を拷問のように詰め込むことよりも、一生涯に渡って学ぶ姿勢を育むような教育が求められているのではないかと思う。今の教育の方向は依然として、学ぶことを苦痛と思わせるような教育になってしまっているのではないだろう

© YOHEI KATO 2020

か。社会のあり方と教育のあり方を歴史的に眺めてみると、両者は相互に影響を与え合う形で変化を遂げてきたことがわかる。

神話的な精神構造と社会システムを持っていた時代には、そうした社会特性に適合した教育が行われていたし、合理的な精神構造と社会システムを持っていた時代には、そうした社会特性に適合しようとする教育が行われていた。確かに現代の精神構造と社会システムは、依然として神話的段階の要素や合理的段階の要素を含むが、そうした段階から少しずつシフトし始めているように感じる。少なくとも、それらの段階特性に適合しようとする教育の耐用年数は切れかかっており、老朽化した部分に歪みが見え始めているのは確かであろう。

現代の精神構造と社会システムに適合した形の教育、いや教育はおそらく、時代の精神構造や社会システムよりも一歩先に行ったものである必要があるかもしれない。それがどのような教育なのかに関する個別具体的な事柄は様々なものが考えられるが、教育のあり方としては、上述のように、学ぶことが苦痛であるような教育から少なくとも脱却し、学ぶことを愛する姿勢を育む教育であることは欠かせないであろう。そのようなことを昨日少しばかり考えていた。

相変わらず小雨が降り続け、小鳥たちが鳴き声を上げ続けている。小雨の音と小鳥たちの鳴き声を聞いていると、特殊な意識状態になり、そうした意識状態の中で今朝方の夢について簡単に振り返りをしたい。

今朝方の夢については少しばかり覚えている。夢の中で私は、実際に通っていた中学校に似た体育館にいた。どうやら今からそこでバスケの部活が始まるようだった。顧問の先生はおらず、キャプテンの自分がその場を仕切って練習を始めることになった。その日は練習試合でもないのに、なぜか体育館の横の4つの扉付近には観客の生徒たちがいた。準備運動を終えた後、そこから少しばかりシュート練習を行うことにした。私が手に持っていたボールは、表面がツルツルの茶色のボールであり、それはボールに手がかかりにくいため、扱いが難しかった。ただしそのボールは、他のボールに比べて軽いため、ロングシュートを打つ際には距離が出るために使いやすかった。手のかかり具合を優先させるのか、重さを優先させるのか、そうした選択を迫られるボールがそれである。

© YOHEI KATO 2020

最初私は、そのボールを使ってロングシュートを打ってみたが、どうも距離が定まらなかった。ゴールへの軌道と方向は問題ないのだが、あとは距離感の調整だけが必要だと思った。しばらくシュートを打つと、徐々に距離感の感覚が掴めてきて、後半からは次々とシュートが入るようになった。そこでシュート練習は一旦切りやめ、早速紅白戦を行うことにした。どういうわけか、紅白戦をしようと思ったら、そこにはバスケ部以外の友人たちや他校の生徒たちもいた。私は特に気にすることなく、彼らを交えてチーム分けをし、そこから紅白戦を行った。試合は随分と白熱したものになった。フローニンゲン：2020/3/10（火）05:54

5610. 意識の純粋な基底：マスメディアと集団催眠

時刻は午後3時を迎えた。今、雨がポツリポツリと書斎の窓ガラスに打ちつけている。

先ほど、グスタフ·レオンハルトがチェンバロで演奏するバッハの曲を聴きながら踊りを踊った。15分ほど無心で踊ると、意識の純粋な基底に触れたかのような感覚になった。

意識の純粋な基底は、治癒と変容をもたらすエネルギーの豊かな土壌である。またそこは、自己の本質さらには自己を超えた存在と深くつながる出会いの場所でもある。そのようなことを感じる。普段から、こうした意識の純粋な基底により触れるように意識しよう。そのためには、意識空間に不純物をできるだけ入れないようにすることが大事であり、不純物の最たる例は、世の中に溢れる雑多な情報である。とりわけ、インターネットなどの情報がそうした不純物に該当する。そうした無駄な情報を意識空間に入れないようにして、絶えず意識空間を明晰かつ穏やかなものにしておこう。不純物で波立たない意識空間から治癒と変容が起こるのだから。

人生の質は、認識の質に左右されるということを改めて思う。種々の変化はやはり認識の変化から生まれているようだということが再確認される。そうした気づきをもたらしてくれる感覚が午前中にあった。

そういえば、一昨日に自己超出的な意識状態に陥ったことが自ずと思い出された。この知覚体験はもう慣れたものではあるが、毎回自己の存在について重要な洞察をもたらしてくれる。この体験が起こるたびに、自己の存在が心身を含めた調整を行い、人生の方向性をより調和の取れたものに

© YOHEI KATO 2020

してくれるように思う。こうした体験に合わせて、仮眠中の意識の深まりが進展していることにも気づく。

今日はいつもより長く30分ほど仮眠を取った。ベッドの上に横になると、すぐさま意識がサトル状態からコーザル状態に至り、夢を見ない深い意識状態に行く。そこで治癒が行われ、目覚めた時には生まれ変わったかのような感覚になることすらある。仮眠後に、本当に新たに人生が始まったような感覚がすることがあるのは不思議である。

今日は午前中に早々と1冊書籍を読み、今は2冊目に取り掛かっている。午前中に読んでいたのはマスメディアと集団催眠に関するものだ。この書籍を読もうと思った背景には、インターネットやマスメディアを通じて集団催眠にかかったゾンビ的人間が増殖している傾向を日増しに感じていたからである。自らの精神を蝕む自傷的な思考や行動を取る人間の増加は、現代社会の病理的な現象かと思われる。

ユングで言うところの個性化が真に果たされていれば、マスメディアや娯楽の世界が構築した仮想世界に自己の世界を模倣させる形で商品やサービスを求めたりはしないように思えるのだが、現代人は決して個性化がはたされているとは言えず、虚構の世界を無批判に受け入れ、それを礼賛する形で自己の世界をそちらに合わせようとするように彼らは行動する。そして、他者と自己を比較する形でなされる衝迫的な嫉妬に突き動かされた消費行動に突き進み、作為的に作られた人工的な欲望に基づく思考と行動を繰り返していく。

広告宣伝が、現代においては擬似的な教育システムとして機能しているのではないだろうか。それは調教システムとして機能しており、強い影響を現代人の思考と行動に与えている。マスメディアとインターネットを通じた情報の流布は、「心理的な汚染（psychological pollution）」と人間のゾンビ化を助長している。書籍を読みながらそのようなことを考えていた。フローニンゲン：2020/3/10（火）15:07

5611. 今朝方の夢：模倣に次ぐ模倣

時刻は午前7時を迎えた。今朝もまた、起床直後から小鳥たちの鳴き声が聞こえていた。それと、今も見えるが、早朝の空には満月が浮かんでいる。

幸いにも今日は晴れのようであり、明後日には小雨の降る時間帯が少々あるが、今週末から来週にかけては晴れマークが続いている。久しぶりに2日以上連続で晴れマークが付くのを見たような気がする。今回の冬は、例年以上に雨の降る日が多く、ほぼ毎日雨がどこかの時間帯に降っていた。ようやくそうした雨季が終わり、春が近づいてきていることを実感する。寒さに関して言えば、例年5月末までは寒さが残っているので、その点は忘れないようにしよう。

今朝方は断片的な夢を見ていた。合計で3つほど印象に残っている場面があるが、それらは全て断片的である。スナップショットのような形で記憶に残っているそれらの夢をざっと振り返ってみる。1つ目としては、母と会話をしている場面があった。母が私の日記を読み、毎日の日記の2つ目の記事の出だしが、いつも曇り空の話であることを笑いながら指摘していた。その指摘を受け、確かにそうかもしれないと思った。ただし、本当にいつも曇り空なのだからそれはしょうがないと笑いながら答えたのを覚えている。

2つ目としては、自分の口腔が拡大され、歯をきれいにしている夢を見た。特に、歯と歯の間に付着している歯垢をブラッシングで落としていく様子が印象に残っている。自分の口の中が拡大され、それを眺めながら自分でブラッシングするというのは不思議な知覚現象だった。自分の目を自分の目で見ることは通常であればできないが、意識状態が変わり、特殊な意識状態であればそうしたことも可能であることを改めて思う。

3つ目としては、応援している日本人のある画家の方が新しい画集を世に出した夢を見ていた。その画家の方は画風を変え、音楽的な要素を絵画に取り入れる試みを始めたようであり、ちょうどポール·クレーやピエト·モンドリアンといった、音楽的なものを絵画に取り入れた画家に関心があったこともあり、偶然だと思った。また、私は音楽的なものが取り入れられた絵画を好む傾向があったため、その方が出版した新しい画集を購入することにした。今朝方はそうした一連の夢を見ていた。実際にはその他にも夢を見ており、もう少し感情的にインパクトのある夢を見ていたのを覚えている。それは肯定的な意味でのインパクトである。

それでは、今日もこれから早朝の作曲実践に取り掛かりたい。ここ最近は、就寝前の1時間は活字の世界から離れ、できるだけ言語的な思考を働かせないようにしている。それを促すために、楽譜や画集をパラパラと眺めることを行い、就寝前には音楽に合わせて踊りを踊るようにしている。

昨夜改めて、作曲理論の理論書に掲載されている譜例をもとに作曲実践を本格的に行っていこうと思った。今も毎日、そうした形で実践を進めているが、これからはもっとそれを推し進めてもいいように思う。例えば、ウォルター·ピストンのハーモニーの書籍と対位法に関する書籍などを参考にして、それらを詰将棋の書籍とみなし、詰将棋を解くような形で譜例を再現しながらそれを曲の中に適用してみる。

今手元にある理論書は随分と多くなったが、それらの全ての理論書に対して、譜例を参考にして曲を作っていく。その過程の中で、音楽的な構造パターンの把握を身体感覚を通じて行い、そうした構造パータンの操作·生成が自由自在にできるようにしていく。

譜例を参考にすることと楽譜を参考にする形の模倣的実践は、徹底して行っていく。模倣に次ぐ模倣は、少なくともあと3年か4年ほど毎日継続させていくことが求められるだろう。こうした模倣実践の中にも自分の創造性が発揮され、コラージュ的な曲が生み出されることは喜びの一つである。フローニンゲン：2020/3/11（水）07:36

5612. 輝く今日という日の中で

つい今し方夕食を食べ終え、時刻は午後7時半を迎えようとしている。今日は1日を通して本当に天気が良かった。天気が良い日は夕方に外に出てウォーキングやジョギングを楽しむだけではなく、昼過ぎには自宅で日光浴をするようにしている。日光浴をする際には薄着になる必要があるため、今の季節のフローニンゲンでそれを外で行うことはできず、自宅で日光浴をする必要がある。ちょうど書斎は太陽の方向に面しているため、昼過ぎに日光浴をする場所としてふさわしい。

道教の実践の中にもお腹に直接日光を当ててエネルギーを取り入れるようなものがあり、それを行っていた。椎茸が太陽の光を浴びてビタミンDを何倍も増大させる点と、椎茸が菌類に分類される点を考えてみたときに、お腹に日光を当てることによって、腸内の菌が活性化されるのではないかとふと思った。それを思ったのは夕方の散歩中のことだった。

夕方に散歩とジョギングを兼ねて、街の中心部のオーガニックスーパーに足を運んだ。ここの店員は皆気さくであり、以前この店を訪れたとき、初老の男性店員と少しばかりレジで会話をしていた。

© YOHEI KATO 2020

そのときには、その店員は私を学生と勘違いしており、私が学生ではない旨を伝え、すでに大学院を卒業したことを伝えると、「職は見つかったのかい？」と心配して尋ねてくれたことがあった。そうした会話が自然となされるのがオランダの特徴であり、人間同士の温かみのあるコミュニケーションが日常至る所で行われる点はホッとさせてくれる。今日はその男性店員はおらず、その代わりに前から話しかけてみようと思っていた女性店員がいた。その店員は優れた美的感覚を兼ね備えているように思え、その点について話を伺ってみようと思っていた。

どの店員もそうであるが、彼女もまたこのスーパーで働いているのは2、3日ほどであり、その他の日は何をしているのか気になっていたのである。直感的に私は、この女性店員は芸術家か何かかと思っていた。店に足を運んだとき、私以外に客はおらず、店員も彼女だけだったので、レジで会計をするときに話かけてみた。やはり彼女は優れた美的感覚を持っていて、この世界の美しい点を見出すような力を持っている点にすぐに気づいた。それは今日の天気の素晴らしさを語った話の中に現れていた。

話を聞くと、彼女はギターの演奏と歌を歌っているらしく、画家ではなかったが、音楽家のようだった。そこからもう少し話を聞くと、もしかしたらギターの演奏活動を止め、大学で歴史を学ぼうと思っているということを教えてくれた。どうやら彼女もまた一生涯学び続ける心を持っているようであり、学ぶことを愛する同士のように思えた。音楽から歴史に分野を変えることは大変興味深く、歴史に関して言えば、それはオランダの歴史を学ぼうとしているのか、それともヨーロッパの歴史なのか、それとも世界史なのか、そのあたりについては話を伺っていなかったので、ぜひ次回話を聞いてみようと思う。

今日は天からの恵みを授かったかのような晴天であったからか、夕方にはそのお礼として、小鳥たちが天に捧げるような鳴き声を上げていた。それを聞きながら、自分も何か天に恩返しをする必要があると思った。小鳥たちを見習いたいと思ったのである。

天への返礼行為が如何なるものなのかは、もう知っている。毎日行っている全ての活動がそれに該当する。全ての活動は天に捧げるためのものとして行っていく。それは天のため、他者のためであり、その中に当たり前のように自分が含まれているのだ。自分のためが先ではない。そうした形で活

© YOHEI KATO 2020

動に従事するところからは脱却した。明日からもまた、天のため、他者のために奉仕していく。自己の幸福感は、利他的な奉仕活動の中にある。フローニンゲン：2020/3/11（水）19:49

5613. 動植物を愛でる気持ちと本の香り

「おっ、可愛いアヒルがいる」と、家の近くの池の前で私は思わず足を止めた。夕方、買い物からの帰り道にその池の前を通り過ぎようとしていると、二羽のアヒルが日向ぼっこをしていた。二羽の色が異なることを見ると、どうやらそれはアヒルのカップルのようだった。私はそっと彼らに近寄り、彼らの姿をより近くで眺めてみようと思った。

最初彼らは近づいてくる私を警戒していたようだが、動物に近づくときには意識を純粋なものにし、彼らに敵と思わせないような術を最近身につけ始めている私は、意識のエネルギーの質感を二羽のアヒルと同様の質感のものにチューニングしてみた。すると、彼らはスッと警戒心を解き、私が近づいても彼らは逃げることがなかった。彼らの輝く毛並みを眺めていると、つくづく創造主はこの世界に素晴らしいものを生み出してくれたのだと思った。

この間は、書斎の窓ガラスの外側に張り付いていたハエを見てそのようなことを思った。生物の多様性と、彼らの身体の精巧さは驚くほどである。

アヒルを見てしばらくうっとりした後、私は自宅に戻った。そう言えば、昨夜歯磨きをしている最中に、過去に父が描いてきた絵をふと思い出していた。父が過去に描いてきた絵を思い出してみると、動植物をモチーフにしたものが多いことに気づいたのである。父は意外と純粋な心を持っているのかもしれないと微笑ましく思ったのと同時に、生き物を愛でる精神を自分も受け継いでいるような気がしたのである。

基本的に私は生き物を不要に殺生することを避けており、それは小さな虫に対してもそうである。例えばクモが時折部屋の中にいるのだが、そのときにはクモを外に逃すようにしている。逃すときには、いつもクモに話しかけている自分がいることにふと気づく。普段私は、言語記号や音楽記号がひしめく抽象的な空間の中に生きているが、動植物といった生き物たちを心底愛しているようなのだ。彼らとの共生の中に生きる喜びと幸福感がある。

今日は午後に、1冊の書籍がイギリスから届けられた。包装を紐解くと、バッハの音楽と数秘術に関する本だった。私は昔から本の香りを嗅ぐのが好きであり、新品の教科書をもらった日には教科書の香りを嗅いでばかりいた。本日届けらた書籍に関して、出版社を確認することなく中身を開き、早速香りを嗅いでみたところ、それはケンブリッジ大学出版の書籍だとすぐに分かった。そして実際に出版社を確認してみると、やはりそうだった。

出版社固有の紙があり、香りが異なるのである。少しばかり気違い染みているが、一度香りを嗅ぐと止められない香りを持つ紙を使った出版社がいくつかある。数日前に届けられた音楽スケールの百科事典の紙はまさにそうした香りを持つものだった。

人間は、音によって意識を変容させることができるだけではなく、おそらく香りを通じても意識を容易に変容させることができるのだと思われる。目には見えないフェロモンが私たちの脳に影響を与えている研究結果などを参照すれば、すぐにその点がわかるだろう。

聴覚と意識状態の探究のみならず、嗅覚と意識状態の探究にも近々乗り出してみようかと思う。その際には、聴覚と嗅覚を関連付け、ある特定の音から特定の香りを引き出すことができないかを探ってみたい。おそらく感覚を開発していけば、音に香りを嗅ぐことは容易なのではないかと思われるため、あとは作曲上において、特定の香りが生起されるような音の作り方を探究していこうと思う。それに向けて、まずは自分の嗅覚をより研ぎ澄ませていこうと思う。そのために、香り辞典のようなものを購入してみよう。フローニンゲン：2020/3/11（水）20:12

5614.「コロナ鬱」に見る報道の歪み：全ては色と音

本日、「コロナ鬱」という現象が日本で見られるようになってきたという話をある方から聞いた。それは、マスメディアが不必要に不安を煽るような形でコロナウイルスについて報道していることが原因として起こっている現象だとのことである。

マスメディアが限定的な情報を歪んだ形で流すことは今に始まったことではないが、報道側には、自分たちの報道が一般人の心身に強い影響を与えてしまう可能性があることや、下手をするとトラウマを生み出しかねないという認識はないのだろうか。

ちょうど9年前の今日は、東日本大震災が起こった日である。この時も、マスメディアが地震の報道を歪んだ形で、尚且つそれを長期間行うことによって、地震そのもの以上に日本国民に集団トラウマを引き起こしたという話を聞いたことがある。

ちょうど昨日読んだ、マスメディアと集団催眠に関する書籍の内容をもとにすれば、現在話題になっているコロナウイルスに関して、集団トラウマを助長・増大させるような形で報道が行われていることは問題なのではないかと思われる。コロナウイルスにかかってもいない人が、報道を見聞きすることによって鬱になるというのは大きな社会問題だろう。

「コロナ鬱」という言葉を教えてくれたその方いわく、マスメディアの歪んだ報道に気づき始めているある程度の知性を持った人は、もうニュースを一切見なくなっているということを聞いた。今回の一件のみならず、社会でまかり通っている嘘や虚構に気づき始めている人が徐々に生まれてきている一方で、依然としてそうした嘘や虚構に踊らされている人がいるという二極化が進み始めているように見える。こうした二極化は、数日前に書き留めた、人間の家畜化・ゾンビ化の問題と密接につながっている。

午前中にふと、色のない音はなく、音のない色はないことに気づいた。また、色と音のないものはこのリアリティに存在しないのではないかという考えも芽生えた。無色という色があり、無音という音さえある。思考も感情も、社会現象においても色と音があるように知覚され始めてきている自分がここにいる。

現代の社会現象の多くに関して言えば、そこには不協和な音が鳴り響いていて、淀んだ色が知覚される。上述の問題に関してもそうだ。その問題の色と音は何かがおかしい。均衡をひどく欠いていて、間違いなく人々の心身に否定的な影響を与える特徴を兼ね備えている。このリアリティの全ての現象は運動であり、運動には色と音がある。その点について同様の主張をしていたのが、インドの音楽家かつ神秘家のハズラト・イナーヤト・ハーンである。今日は彼の“The Mysticism of Sound and Music”という書籍の初読を終えた。本書には随所に叡智が散りばめられていて、音楽と神秘主義的な思想に対する理解を深めていく上で非常に参考になる書籍だった。

© YOHEI KATO 2020

ハーンの書籍についてはその他にも、“The Inner Nature and Effects of Sound”が先日届けられ、これは近日中に初読をする予定である。今月も大量に書籍を注文し、続々と書籍が届けられたが、毎日1、2冊読み進めていると、気がつけば積読されている書籍は大して残っていないことに気づく。

来月の書籍の一括注文までには、まだ読んでいない書籍を全て読むことができるだろう。来月は少し分野を変えていく、ないしは広げていくことを考えており、来月もまた旺盛な読書をすることになるだろう。フローニンゲン：2020/3/11（水）20:37

5615. 早朝に思うこと：今後の生活拠点

時刻は午前3時半を過ぎた。今朝は午前3時に起床し、起床した直後に小鳥たちの鳴き声を聞くことはなかった。どうやら今日は、彼らよりも先に起床したようである。

今はとても強い風が吹いており、彼らが鳴き声を上げ始めるまでには風が和らいでいて欲しいと思う。強風の中で過ごすのは彼らにとって大変だろうから。

そういえば今朝は、一度パッと午前1時に目が覚めた。その時間帯に起きるのは早過ぎると思ったのでもう一度眠りの世界の中に落ち、次に目覚めた時、午前3時ぐらいだろうと思って時計を確認したら、ぴったり午前3時だった。

今日もまた自分の取り組みに思う存分従事したい。今日はケンブリッジ大学出版から出版された、バッハの音楽と数秘術に関する書籍を読みたいと思う。その書籍の初読が終われば、その勢いで、先日届いたポール·クレーに関する日記を読み進める。こちらの書籍は、カリフォルニア大学出版から出版されており、ケンブリッジ大学出版に比べれば、こちらの出版社にお世話になることはあまりなかったが、どちらも学術書に関して定評のある出版社だ。

今年の夏は、やはりスイスを再訪し、その際にクレー美術館に足を運ぼうと思っている。その旅の前に、上記の日記を再読したいと思う。

今朝起床したときに、そういえばと思うことがあった。コロナウイルスの影響を受けて、サッカーW杯の予選も延期になるかもしれないという話を見聞きした。

そういえば私は、日本が始めてW杯に出場して以降今に至るまで、一度たりとも同じ場所でW杯を観戦していなかったことに気づいたのである。フランス大会の時は、小中学校時代を過ごした社宅で観戦し、自国開催の時は、引っ越した先の社宅で観戦していた。ドイツ大会に関して言えば、当時は大学生であり、東京の学生マンションで試合を観戦していたのを覚えている。その後、社会人2年目の時に南アフリカ大会を迎え、その時は勤務地の大阪で試合を観戦していた。次のブラジル大会は、ロサンゼルス（厳密にはアーバイン）で生活をしていた時であり、ロサンゼルスで試合を観戦していた。直近のロシア大会は、オランダで観戦をした。セネガル戦のみ、旅先のロンドンで観戦をしたが、基本的にはフローニンゲンの自宅で試合を観戦していた。

今のところ、もうしばらくはフローニンゲンを拠点に生活をしようと思っており、今度のカタール大会は再度フローニンゲンの自宅で観戦をすることになるだろう。そのようなことを考えていると、W杯を二大会続けて同じ生活地で観戦するのは、次の大会が人生で初となることをふと思った。

昨日、街の中心部にあるオーガニックスーパーの店員の女性と話をしていた時、彼女はアムステルダムとロッテルダムで生活をしていたことがあるそうだが、フローニンゲンの街が一番落ち着けると判断したらしく、フローニンゲンで今後も生活をしていくということを述べていた。私も同じような考えを持っており、今後も引き続きフローニンゲンで生活をしていくことになりそうだ。

生活拠点の一つは今後もオランダに置き続けたいと思う。オランダ永住権と欧州永住権を合わせて取得するのが2、3年後であり、それらを取得したら、オランダ以外の欧州内のどこかの国にもう1箇所生活拠点を設けようと思う。今のところは、フィンランドが第一候補だ。

もう少し暖かい地中海のどこかの国に生活拠点を設けることも考えたが、フィンランドの持つ雄大な自然が自分の心身を落ち着かせてくれることを以前訪問した際に体感したこともあり、今のところはフィンランドにも生活拠点を置くことを考えている。そのようなことを早朝に考えていた。フローニンゲン：2020/3/12（木）04:05

© YOHEI KATO 2020

5616. 今朝方の夢

時刻は午前4時を迎えたが、起床直後と変わらずに、風が強い。だが幸いにも今日は雨が降ることがなく、太陽の姿を拝めるようなので、今日もまた適度に日光浴をしたい。

最近の作曲実践では、理論書を片手に、一手詰、三手詰の詰将棋の問題を作成するイメージで曲を作っている。以前は、数学の問題を解くのと似たところが作曲にはあると思っていたが、確かに作曲プロセスの至る所で問題解決を迫られる要素はあるが、そこには問題解決のみならず、やはり創造するということが大きく関与しており、数学の問題を単に解くのとはそこが若干の相違点だろうか。

問題解決をしながら創造をしていくという点だけを取ってみれば、プログラミングを書くことに似ているかもしれない。フローニンゲン大学で行っていた発達研究においては、プログラミングコードを書くこともあり、そうした類似性がふと想起された。プログラミングコードを書くことの中にも楽しさと充実感があったが、今の私はやはり曲を作ることに1番の喜びを感じている。

それでは今朝方の夢を振り返り、その後早速早朝の作曲実践に取り掛かりたい。今朝はいつもより少し早く起床したこともあり、読書と作曲実践を十分に楽しむことができそうだ。

夢の中で私は、小学校時代に所属していたサッカークラブが使っていたグラウンドにいた。そこは今はもう使われておらず、グラウンドには雑草が生い茂っている。夢の中のグラウンドは、当時のままであった。そこで私は、友人たちと一緒にサッカーの練習をしていた。

センタリングからのシュート練習を始めた時、私は右サイドから何度かセンタリングを上げることを行っていた。その後、私はグラウンドを自由自在に動く役割を担い、中央からサイドの友人にボールを配給し、彼らにセンタリングを上げてもらうことを行っていた。

しばらくこの練習を続けていると、ボールを積極的に受けようとする人が徐々に少なくなってきた感覚があった。彼らの動き出しが遅く、私がボールを保持する時間が長くなっていることが気がかりになってきた。私としては、もっと積極的に早く動き出し、ボールを引き出して欲しいと思っていたのだが、彼らの実際の動きはそうではなかった。そのため、サイドにボールを配給するのではなく、自分

がゴール前までボールを運び、自らシュートを打とうと思った。実際にそれで何度かゴールを決め、最後に放ったシュートがゴールネットを揺らした時、夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は欧州のどこかの国の城にいた。城の雰囲気から察するに、そこはオランダではないことは確かだった。巨大な城の最上階の部屋で、私はクラシック音楽のコンサートに参加していた。主たる演目は、チャイコフスキーの交響曲だった。曲の前半部分が終わると、そこで一度休憩に入った。

前半部分の最後の盛り上がりの箇所がとても印象に残っていて、休憩に入った直後はその感動で身動きができず、しばらく席に腰掛けたまま余韻に浸っていた。すると、前の列に、フローニンゲン大学で以前お世話になっていたサスキア·クネン教授がいることに気づいた。クネン教授も席に腰掛けたまま余韻を味わっているようだった。

私は用事があったので、前半部分を聞いた後にその場を後にしようと考えていた。その前に、先生に挨拶をしようと思ったのだが、どういうわけかそれが躊躇われた。他の客たちは全員休憩のために席を立ち、城の一階で振舞われる飲み物を取りに向かっていた。しばらくして、先生はようやくゆっくりと立ち上がった。そして、最上階のフロアの窓際に行き、そこから城の外を微笑みながら眺めていた。

外は、冬の欧州らしいほのかな太陽光が差していて、静かな浄福感が広がっていた。外の世界を眺める先生の様子を私は見守っており、しばらくして、先生も飲み物を取りにフロアを後にしようとしていた。先生が私の近くを通った時、自分のことに気づくかと思ったが、私には気づかなかった。すると、先生の元で博士号を取得した若い研究者の女性がちょうどやってきて、先生に笑顔で話しかけ、先生は彼女の腕を取り、2人は腕を組んでフロアを後にした。そこで目が覚めた時、夢の中で聴いていたチャイコフスキーの交響曲が残り香のように脳内に残っており、ベッドの上で再度感動を味わっていた。

昨日、インドの音楽家かつ神秘家のハズラト·イナーヤト·ハーンの書籍“The Mysticism of Sound and Music”を読み進めている中で、意識の発達に伴い、夢の世界がより微細なものになるということをハーンが述べていることが大変興味深く思えた。意識の発達と無意識の世界との間にそうした関

係性があることは想像に難くない。自分自身に焦点を当ててみると、確かに自らの意識の発達に合わせて、夢の世界がより微細なものになり、それと同時に、夢の世界をより微細に思い出すことができているように思う。顕在意識の発達と無意識の世界との間には、その他にも何か関係があるかもしれない。その点も今後の探究テーマである。フローニンゲン：2020/3/12（木）04:35

5617. バッハとテレマンに関する思い出と彼らが作曲に活用した数秘術

時刻は午前7時半を迎えた。今から2時間ほど前には、強風と激しい雨が一時降ったが、今は雨が止み、外は明るくなっている。小鳥たちの泣き声がどこからともなく聞こえてきて、空には満月が浮かんでいる。昨日も朝に満月を眺めたが、今朝は満月を眺めながら、「いつか月に行ってみたい」ではなく、「いつか月に行ってみよう」と思った。月で日記を書き、月で曲を書く日がいつかやってくるように思う。その時は今とは逆に、月から地球を眺め、地球を想いながら言葉と音を生み出していくことになるだろう。

今朝は午前3時に起床したおかげもあり、準備運動がてらの早朝の作曲実践を行い、そして1冊ほど書籍を早々に読み終えた。先ほど食い入るように読み進めていたのは、バッハと数秘術に関する“Bach and the Riddle of the Number Alphabet”という書籍だ。この書籍については昨日も言及したように、ケンブリッジ大学出版から出版されており、この出版社の書籍が持つ固有の香りを私は気に入っている。書籍を開き、すぐさま内容の読解に入っていくのではなく、しばらく書籍に顔を近づけたまま書籍の香りを楽しんでいた。これは昔からの癖であり、実家に帰ってこの行動をしていると、母に変態だと言われたことがある。

ちょうど偶然にも、一昨夜、就寝前に「変態」という言葉について考えており、それは英語で言えば「変容」を示す“transformation”という言葉で同じく表すことができ、「継続的な変容をしていくためには、変態質である必要がある」というようなことを考えていたことを思い出す。

上記の書籍の香りを嗅いでいると、プログラミング言語のRのトレーニングを受けるために、今から5年前にケンブリッジ大学を訪れたことを思い出した。5日間かそこからの集中的なトレーニングの合間に、実際にケンブリッジ大学出版の本店に足を運び、そこで書籍を大量に購入した。それらの一冊一冊の香りをホテルの自室で楽しんでいた時のことが懐かしく思い出される。

先ほど上記の書籍を読む中で、バッハがユダヤ教のカバラの影響を受けていたことが興味深く思えた。実はバッハと同年代に活躍したテレマンも数学と音楽の関係を探究していたことがわかり、2人の共通性を新たに見出した。テレマンについても個人的に思い入れがあり、ケンブリッジ大学を訪れたのは違う年にロンドンに足を運んだ際に、大英図書館でテレマンの楽譜を参考にしながら作曲実践をしていた日のことをふと思い出した。ロンドン旅行の際に持参したのはテレマンの楽譜であり、それを参考に曲を作るために大英図書館を訪れた。大英図書館では、過去の偉大な作曲家の直筆の楽譜が1階に所蔵されており、それを好奇心で見開いた目を持って閲覧していたことを覚えている。

数秘術や数学を活用して曲を作ること自体はそれほど難しくないのだが、それらを活用してバッハやテレマンのように美しい曲を作るのは本当に神業である。昨日読み終えたハズラト·イナーヤト·ハーンの書籍“The Mysticism of Sound and Music”にも記述があったが、数字には意識に働きかける固有の力がある。それぞれの数字が持つ意識作用の探究も行い、それを作曲実践に活かして行こう。また、古代の言語·文字には意識に強く働きかける固有の力（呪術的な力）があったという記述も気になるところであり、これは言語哲学者の井筒俊彦先生が“Language and Magic”という書籍の中で主題として扱っていることでもある。

ちょうど先日、『舟を編む』という日本のアニメを視聴した。これは大変面白いアニメであり、辞書作りに励む主人公が、人生を賭けて1冊の辞書を作っていく物語である。このアニメに影響を受けて、今度日本に一時帰国した際には物理的な辞書を購入したいと思ったほどだ。もし辞書を購入するのであれば、古典漢字が含まれた漢字辞典も調べてみよう。曲のタイトルに古典漢字を活用することを考えていく。人生を賭けて音を編むことに従事し続けていきたいという思いを新たにする。フローニンゲン：2020/3/12（木）07:51

5618. バッハの音楽とダ・ヴィンチコード：数秘術を活用した作曲実践のアイデア

バッハの音楽と数秘術に関する書籍を読み進めていると、バッハの音楽に潜む暗号が浮かび上がってきて、それはさながらダ·ヴィンチコードのようだと思った。そこでふと、今年の年初にミラノを訪れた際に、実際にこの目で見たダ·ヴィンチが残した直筆のノートのことが思い出された。

© YOHEI KATO 2020

偶然にも、ダ·ヴィンチの没後500年記念として、様々な美術館でダ·ヴィンチの展覧会が行われており、そこでダ·ヴィンチに関する様々な資料や作品を閲覧することができた。その時の体験は、自分の意識と無意識に少なからぬ影響を与えている。

今日はあと2時間後にオンラインミーティングがある。今の自分の理想としては、1週間に3~4時間ほど働くことであり(1日ではなく、1週間で3~4時間)、その理想通りの生活を送ることができている。1週間に5時間以上働くことはもはや過労である。ただし、自分の取り組みを全てライフワークとして括れば、毎日朝5時か6時から夜の9時までそれに従事していることになる。そんな生活をここ1年半ほど送っている。

フローニンゲン大学で研究をしていた時には、研究と企業との協働プロジェクトに1日の時間をほぼ全て充てており、日記を執筆する以外の時間を取ることはなかなか難しかったことを覚えている。学術機関での研究から離れてから、徐々に創造活動に充てる時間が増えてきて今に至る。今のこうした状態で日々を過ごすことは、えも言われぬ幸福感を感じさせてくれることを考えてみると、やはり今の日々の過ごし方が理想的なのだろう。

それではオンラインミーティングまでの時間を再び作曲実践に使いたい。その際には、先ほど読み進めていた書籍の内容から閃いたことを早速試してみよう。例えば、その曲で伝えたいメッセージを一つの英単語(例えばindignation)で表し、その単語を一つ一つのアルファベットに分解し、カバラ的な数秘術を用いて数値化し、その数値に対応させた音ないしは和音を活用するというアイデアがある。または、曲の小節の冒頭にその単語のアルファベットに対応した音を配置していくというアイデアもある。さらには、曲の終わりに、あるいは曲の冒頭で早々と、その曲のメッセージを投げかけるのも一つの方法かもしれない。

そこからさらに考えを巡らせていると、単語が持つ一つ一つのアルファベットを数値化すると、それは12の数を超えてくるので、そうした数は素数にでも分解し、各素数に対応する音を当てていくのも一案だと思った(その際には、それ専用の音列をまず作る必要があるが)。アルファベットは26個の文字で構成されているため、12音の音列を2つ作成すれば、全てのアルファベットをそれら2つの音列で表すことができる(最初の音に戻ってくることを考えると13*2=26)。このアイデアを採用すれば、一つの単語を用いたメッセージだけではなく、文章をそっくりそのまま音に変換することができ

る。例えば、“I love you very much.”や“It is a beaufitul day, today.”といった文章をそっくりそのまま音化できるのではないかと思い、早速このアイデアを試してみようと思う。

仮に最初の音の重複を避けるのであれば、Latin natural-orderのvariation1を活用してみるのもいいだろう。これは“J”と“V”を除く、24個のアルファベットを数値化したものである。これを活用する際に、表現したい文章の中でJとVのアルファベットを活用する時には、ジョーカーとして好きな音を活用するというようなルールを適用してみてもいいだろう。それか、ヨハン·クリストフ·フェイバー（1669-1744）というドイツの作曲家が暗号学的にアルファベットに対応した音列を発明しており（Faber’s cryptographic invention）、それをそのまま活用するという方法もある。

今から早速自分のアイデアとフェイバーのアイデアの両方を試し、2曲作ってみる。前者の自分のアイデアであれば、JとVのアルファベットを使う言葉を用いる際には、その曲のコンテクストに合わせて自由に音を選ぶ。一方で、フェイバーのアイデアの場合には、全てのアルファベットに対応する決められた音を使う必要があり、音列を眺める限りだとダイアトニックの音階しか表現できないようなので、クロマティックな音を使う際には工夫が必要かと思われる。そのあたりの工夫も臨機応変に行ってみようと思う。フローニンゲン：2020/3/12（木）08:10

5619. クレーの日記を読んで：香りを引き出す音の探究

時刻は午後7時を迎えた。今日は少し早めに夕食を摂り、食後のこの時間帯に今日を振り返る日記を書いている。今日の大半は太陽の姿を拝むことができ、夕方に少しだけ雨が降った。今はまた少し雨雲が出てきており、夜から朝にかけて雨が降るそうだ。このところは晴れの時には室内で薄着になって日光浴をしている。日光浴をしてから心身の調子がまた一段と良くなっているように思うのも不思議なことではないだろう。

もう数ヶ月したら、オランダでの5年目の生活が始まることになるのだが、冬の時期にこうした日光浴の方法があることをこれまで閃かなかった自分が不思議である。ここから数ヶ月間はまだ寒さが残っているので、引き続き日中は室内で薄着になって日光浴を楽しみたいと思う。

振り返ってみると、今日もまた非常に充実した1日だった。早朝の時間帯にバッハの音楽と数秘術に関する書籍を読み、その後、クレーの日記に取り掛かり始めた。クレーの日記も食い入るように読

み進めることができており、400ページほどに渡る日記もあと少しで初読が完了する。これからメールに返信をし、その後にまたクレーの日記を読みたいと思う。

クレーとの出会いも必然であったという実感があり、その実感をもとに、この夏はスイスのベルンに行き、クレー美術館に足を運ぶ。あと2週間ほどしたらアテネ旅行が待っており、その旅行から帰ってきたらまた集中的に読書と創造活動に励み、夏のスイス旅行まで自分の取り組みに没頭して行こう。

もしかしたらスイスに行くまでの間に、オランダ国内旅行として、モンドリアンの美術館に足を運ぶかもしれない。日帰りでもいいし、一泊ほど美術館がある街に滞在してもいいだろう。そうこうしているうちにアテネ旅行が近づいてきており、スイス旅行に関してもすぐに出発の日がやってくるだろう。そして、秋の日本への一時帰国も思っているよりも早くにやってくるだろう。そのような予感がする。

今日もまた作曲実践を楽しんだ。今は引き続き実験的に曲を作っている。試したいことが諸々あり、曲の出来を気にすることなく、手当たり次第に新たな観点を実験している。ここのところは、一つ一つの音の響きを確認していくために、ゆったりとしたテンポの曲を意識的に作っている。歌に対する意識を強く持っていることもまた、ゆったりとしたテンポの曲を生み出していることにつながっているのかもしれない。仮に人間が歌えないような曲であったとしても、自分の内側で音の創造を司っているものが歌えればそれでいいのかもしれない。

昨日に音と香りの関係について言及していたように、香りを引き出す音の探究もゆっくりと行っていきたい。音には色が付いているだけでなく、香りが付いていると考えても何らおかしなことではなく、音に香りを嗅ぐことができないのは、きっとそれを知覚する感覚が未開発だからだ。その感覚の開発を行っていく。

ここでもまた意識状態の研究や身体心理学の研究が有益になるだろう。そうした研究成果を参照しながら、音に香りを嗅ぐ感覚を開発していこう。その鍛錬を続けていけば、もしかすると、嗅覚のみならず、他の感覚を刺激する音の特性を掴むことができ、諸々の感覚を刺激する音を自由自在に生み出していくことができるようになるかもしれない。それが実現されれば、どれほどの喜びが得られるだろうか。フローニンゲン：2020/3/12（木）19:26

© YOHEI KATO 2020

5620. 寒さの残るフローニンゲンと暖かくなるアテネ:今朝方の夢

時刻は午前4時を迎えた。今朝は、昨日よりも30分遅く午前3時半に起床した。それでもその時間帯に起床できると、自分の取り組みに従事する時間がとても多くなったような気がする。

朝のそうした時間帯に起床できるリズムと心身の状態があることを有り難く思おう。こうした時間帯に起床できる要因について考えてみると、やはり就寝前に何をするのかと、就寝に向けての状態をどのようなものにしていくかが鍵を握っているように思う。

ここ最近は特に、午後9時を過ぎると書物などの活字情報から離れ、思考を司る脳の部位を働かせないようにしている。その代わりに楽譜や画集を眺めたりしており、その後に9時半過ぎまで音楽をかけながら踊りを踊るようにしている。体をほぐすようにして踊りを踊ることは、入眠前のストレッチのような機能を果たしており、これが良質な睡眠をもたらし、早起きを実現させているように思える。

今、闇の世界の中に冷たい雨が降っている。そして風も強い。

今日の最高気温は8度であり、最低気温はマイナス1度のことだ。ここ最近は最高気温が10度を超える日もあったのだが、まだまだ寒さが残る季節である。

再来週の今頃はアテネにいる。アテネの気温を確認してみたところ、なんと最高気温が23度もあり、最低気温も11度暖かい。最低気温はフローニンゲンの最高気温よりも高いではないか。

新型コロナウイルスが気温に対してどのように反応するのかは未知らしいが、一般的なウイルスと同じように、暖かい気温によって活動が減退してくれることを祈る。仮にコロナウイルスが熱に弱ければ、アテネの気温を眺める限りだと、アテネの事態は好転するのではないかと思う。

今日は足元から冷えると思っていたら、そういえば昨夜からヒーターがつかなくなってしまっていることを思い出した。また、お湯も出ない。毎年こうしたことが起こるのだが、今日のように寒い日に起こるのは少々残念だ。ヒーターとお湯が機能しないとまだまだ厳しい時期であるため、午前中に不動産屋に連絡をしておこうと思う。昨日ガスの点検があり、ひょっとすると、ガス屋が何かの拍子に

ヒーターとお湯の機能を司るスイッチをいじってしまったのではないかと推測される。今はヒーターがつかないので、当面の間は湯たんぽを使って体を温めることにしたい。

今朝方も夢を見ていたのだが、少しばかり記憶が薄まり始めているので、それについて書き留め、早朝の作曲実践に移っていきたいと思う。夢の中で私は、小中高時代の友人(TO)と立ち話をしていた。特に真面目な話題でもなく、お互いに笑顔を交えて話をしていたのを覚えている。その場面があった後、私の体は一軒家に瞬間移動した。そこには大学時代に知り合った他大学の先輩がいて、その方は学生時代から投資をしており、今も投資家として生活をしているようだった。

その方とある投資銘柄について話をし、ひょんなことからちょっとしたゲームを行うことになった。それは、その投資銘柄の今後を予測し、オプション取引をするというものである。私はその銘柄の価格が下がることを予測し、プットオプションを選択した。逆に先輩はコールオプションを選択した。

すると、2人で話をしているそばから、その投資銘柄の価格が動き始めた。私の予想とは逆に、それは高騰していく方向に動いていった。だが私は、ファンダメンタルズ分析からその後必ず下降に転じると考えており、特に心配することなく状況を見守ることにした。そこからも先輩と話を続け、あるところで先輩がその場を片付け始め、自慢の布団を見せてくれた。何やらそれは体に良いマットらしく、筋力を鍛える効果もあるとのことであった。

ちゃぶ台のようなテーブルを脇にどけて、先輩は畳の上に布団を広げた。すると突然、巨大なカプセルが現れ、先輩はその中に入っていった。どうやらそれは睡眠カプセルのようであり、その中で寝れるようになっているらしかった。先輩はカプセルに入り、その中からカプセルの内側の様子を説明してくれた。そこで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、私はホテルのレストランにいた。ちょうど昼食どきのようであり、レストランには客の姿が散見された。私は軽く何かを食べようと思い、ビュッフェ形式で提供されている食べ物を取って行こうと思った。しかし、タイミングが悪く、自分が食べたいと思ってるものがあまり残っておらず、チーズとパン、それにコーヒー程度にしようかと思った。それらをトレイに乗せて自分の席に戻ろうとしたところ、ちょうど父もそこにいて、父がフォークやナイフの場所を教えてくれた。それらを持って自分の席に戻ったところで夢から醒めた。フローニンゲン:2020/3/13(金)04:49